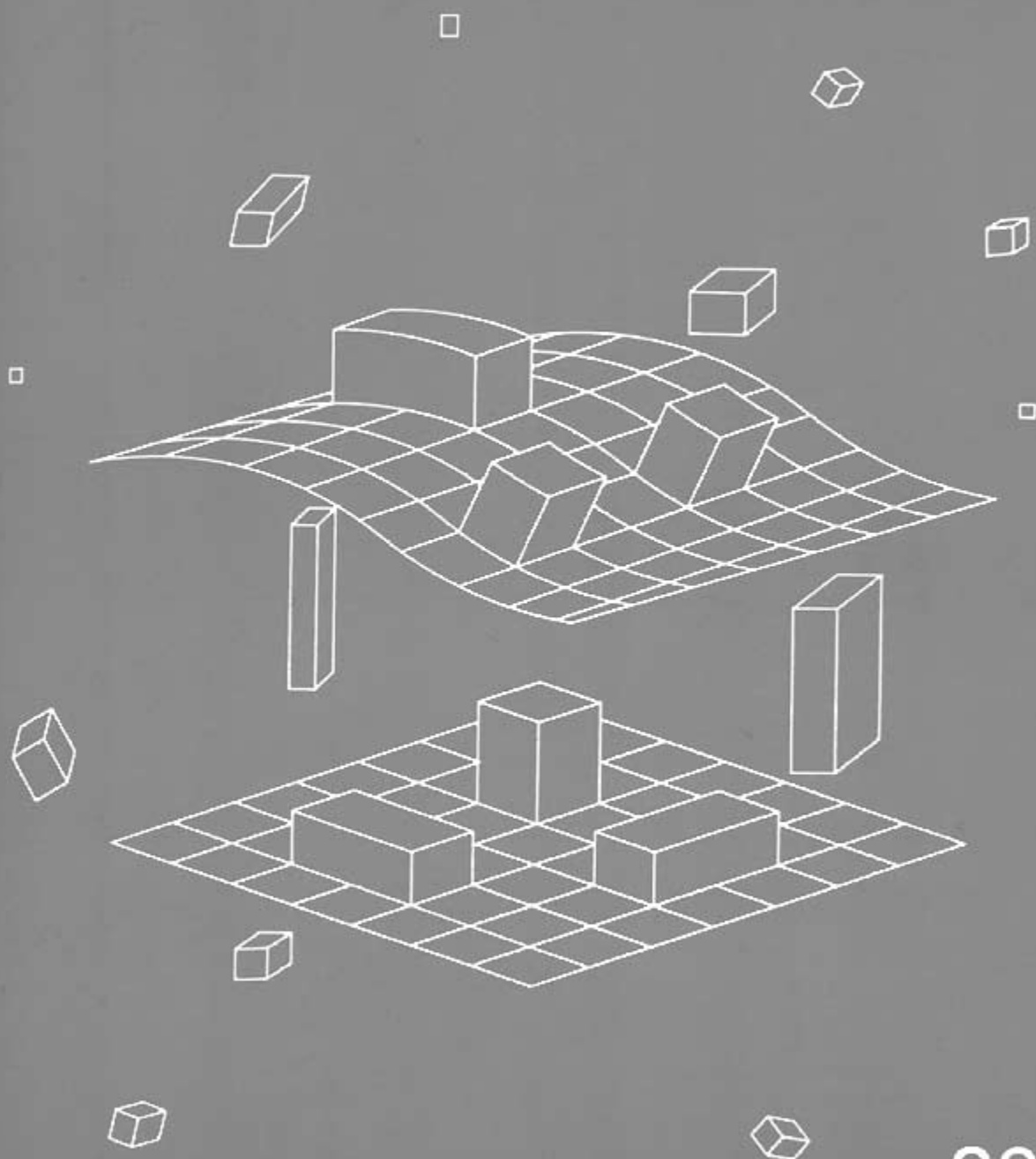


# ITSUMIKAI



NO. 28  
平成13年度版

# 目 次

会長あいさつ	3
新世紀に当たって…貴方(女)へ	4
五三会の皆様へ	5
第27回五三会建築設計競技結果報告	6
在学生から一言	16
発表「五三会学生大賞」	19
編集委員会の活動	20
五三会活動報告	22
五三会収支決算報告	23
五三會会則	24
卒業生一覧表	26
広島工業大学建築・環境系教職員名簿	27
編集後記	28

# ごあいさつ

## 会長あいさつ



五三会会長  
山野正晴 (S54年卒)

2001年という新しい世紀を迎え会員の皆様方におかれましては、期待と夢に心踊らせておられると同時に非常に厳しい社会情勢のもと鼓舞奮闘されていることとお察し申し上げます。

平素は五三会活動に御協力いただきまして厚くお礼申し上げます。

五三会も会員数約7000名という大所帯となってまいりました。また親子で五三会会員という話しも耳にするようになってきた昨今でございます。

各事業等におきましても会員のみならずいろいろな方々の御協力・御賛同を得まして世代だけでなく戦域をこえ、会員の枠を越えたまさに五三会だからできる事業へと発展しています。

交流事業・競技設計・会報誌・顕彰制度・ゴルフコンペ等々

その中でも五三会競技設計の活動は非常に楽しみな展開をみせていると思っています。産・官・学をつなぐ役割をしなやかに果たす場を設定できる可能性を示しているようにも思います。

会報誌におきましても今後インターネットによるホームページの開設等の意見も出始めていますし、タイムリーな双方向のコミュニケーションがとれば五三会活動もさらに発展するかと思います。

現在、五三会の活動は会員ボランティアで

支えられた会として活動しています。事務作業、雑務等も増大するなか五三会の今後のビジョン設定・活動目的等を明確にしながら個々の目的意識のもと邁進できればと思います。発展・成長のキーワードはあくまで「たのしさ」ということかと思えます。「たのしさ」を享受するためだけでなく「たのしさ」を共に創り出せる集まりとして発展していければと思います。

いろいろな意味での「たのしさ」を持ち寄り、また発信する会として、大学、社会との相互リンクのなか会員皆様のもと、五三会の成長・発展を支えていただきますようお願いいたします。

最後に五三会事業に骨身もおしませ御協力いただきました各大学の先生また、諸官庁の方々、学生の皆様それからこの会報誌のスポンサー協力をして下さった各企業の皆様にご心よりお礼を申しあげるとともに皆様のますますの御発展を祈念いたします。

今後とも会の主旨を御理解いただき御協力のほどよろしくお願いいたします。

## 新世紀に当って…貴方(女)へ…



環境デザイン学科  
教授 水田 一 征

年年歳歳、貴方(女)と同じく、私も年を取る。やむを得ない。そして、必然的に若いことから距離が増大していくこともやむを得ない。自然なことでさえあると思う。「近ごろの若い者は…」との言い古されている古き者の常套語のレベルのことを、そのことは指していると思う。時代や様式の変遷なんてそんなものでしょう。しかも、そうでないと困ったものでもある。

だが、新世紀だからではないが、たまたまであれ新世紀の始まりに際して、日頃接している若者を見ながら、ことはもっと深刻ではないかと直感しているのです。何かもっと奥底の基盤の変化とも言うべき変様を感じる日頃です。いや、変化・変様は何かがある前提でその何かが変わることなので、日頃という日常のことなのに日頃とは感じられないような何もないに等しい絶対的欠如に等しい戦慄さえ感じると言えば大袈裟ですが、それに近いものを感じることがあります。知識や手法の欠如ではありません。子育て最中の貴方(女)であれば特に、放っておけないような危機感を体で解ることがありませんか。焦燥感や中途半端さは至る所に漂っている。特に私も五三会の会員の諸君も生きてきた、生きている、そして生きていかねばならない時代は、羅針盤なしの航海に似て予想・予料・計画が成立しにくいものであるから。船を仕立てることさえ疑うような…。新世紀の始まりに当面して、何程かの感慨もあろうものとは思いつつ、何より二十世紀の時代の動向は、実に過ぎて見れば該当然の出来事の連続のようにも思えるが、それ以前には出会うことができないような多様な動向現象の展開であったことの、生体にとって包摂不可能なほどのその過剰さの、改めての認識を迫られていたと言うことこそがふさわしい。ものごとの現れ方の固有が軽視されて、バンドラの箱を開けた如くに、開かれた間の数々が散逸した。そのそこに今の若者も居合わせられて、立脚点が形成できない焦燥感の証しが、大学を含む社会での根源的变化ではないかと直感しています。人生の・芯・心が形成されないのです。

そうすると刹那的実体主義に縛るのは当然の成り行きだ。積極的な意義を見つけてそうするのではなく消極的な逃避の姿勢として、もうこの判断基準が無ければ自分の自の分さえ拡散してしまう危険を避けて、金額や数字、法律の条文や過去のルールにすがりつくしかない。口を開けば「人それぞれ」と言うが、今の若者ほど一律でファッショナファッションや顔貌をしている時代を、国を、私は知らない。だから、世は正に「自分」についての「本物探し」の無い物ねだりと「実体としての物を究極的存在」とする不幸な信仰に横溢する。視点の変換がそこには無い。「自」の視点を「他」の(「公」でもある)観点に置換できる時に、自己と他者が成立するし、大人であることになるのに、何時までも大人に成れない自分しか居ない。その孤立した、閉ざされた、そこから出ない「自分」という個人の放縦を礼賛する風潮が更に、当然に労働を尊び連帯する心を衰弱させた。加うるに、団結よりは多様性を奨励する教育と情報が相俟っては、当然に又、文化の自殺行為と政治的拡散に至るしかない。「誰に迷惑をかけるわけじゃないし」と囁きつつ人前で携帯電話し化粧する姿は、米国が多文化主義の攻撃に晒されて崩壊の道を辿りつつ在ると同様の、日本の多様な個人主義という相対主義が、社会そのものと個人のアイデンティティを崩壊させつつ在ることを示している。単に礼儀作法を知らない無知とは、層を異にする現象と見える。学科も、大学も、この気分侵されつつあり、若い卒業生たちに同窓会が存在感を持たなくなりつつあることも予想できる。それでも、何時か、近視的日常的損得に倦み、ふと旅立ちへの心が生じるかも知れない。追憶であれ再確認であれ、若き時代を共にした「初心」を惟いつつ復元する同窓会があれば、他の出来事では生成しない稀で貴重な故郷への帰還の豊かさではないだろうか。シンプルでバランスある有意味なるデザインへ…、持続こそ力なり、である。五三会の永続の努力が、即ち、会員の皆さんの参加が、拡散し中性化した時にこそ、切望される。

## 五三会の皆様へ



建設工学科

教授 浅野 照雄

本学科建築工学コースは「構造系」を主体として、旧建築学科を改組して土木工学科に新設してから8年、土木工学科を建設工学科に改名してから4年経過し、今年度（平成12年度）は建設工学科としては初めての卒業生を送り出すこととなります。ご承知の通り、本学科には「広土会」という同窓会があり、全員その会員になっております。しかし、建築工学コースの学生の中には、「五三会」主催のコンペに参加したり、卒業後、「五三会」の会員にもなって活動しようとしていたりする人も多くと聞いています。「同窓会」って何？というところで若い人は馴染めないかも知れませんが、「建築」という分野で同窓会を通して互いの情報交換をしたりして親交を深め、それによって同窓生が少しでも豊かな人生を送ることができるよう同窓会を積極的に利用して欲しいと思います。ただ、建設業界が不況の中で体質改善を迫られている現状を見ると、同窓会のあり方もそのような方向で会員同士が啓発し合う場となるようにして欲しいと思います。同窓会が何かをしてくれるという「依存」型ではなく、何かを掴んで育てていくという「創造」型にしていかなければ、本当の意味で互いの幸福は得られないのではないかと思います。

昨今、世は「IT革命」「情報化時代」等という言葉や文字がテレビ、新聞、雑誌などを賑わしています。また、一方では「教育改革」の実施が叫ばれています。「IT革命」によって建設分野でもインターネットなどのITの導入が必要となることでしょう。そのような状況の中で、以下に「情報」と「教育」について感じていることを述べさせていただきます。

産業革命以来、利便性、効率性を求めて技術が進歩し、私たちの生活環境は大きく変化してきましたが、一方では社会問題となることも生じてきています。特に、近年のいわゆる「ハイテク技術」により、その変化が加速度的となっています。すなわち、小型凝縮化、ネットワークによる高密度化、高速化などの技術の進歩により、私たちの生活は「ハイテク技術」に守られ、縛られたものとなり、たとえそれによって問題が生じて後戻りができない状態にあります。私たちは確かにこれらの恩恵を享受しており、この現状をやむを得ずとして認めるとすれば、その体制に潜む問題点をよく検討して最善のシステムを作っていくかなければなりません。利便性、効率性という人間の「欲望」と「経済性」などの目先のものを追求してハイテク技術が進歩していけば、恩恵に与る人間の人間性が変化して

いくと考えられますし、一方では技術力のポテンシャルはますます上昇し、そのシステムの破綻による影響は極めて大きいものとなっていきます。しかし、今日の社会情勢をみると、その技術の変化があまりに急激であり、また、技術がもたらすものが魅力的であるために、私たちはそれを利用する「人間」に及ぼす様々な面での影響をよく検討していないように思われます。私たちは「建築」という分野で人々の「安全」は「快適」な生活空間を創造するべく活動しておりますが、テクノロジーによる生活環境の変化の中で、ハイテク技術の進歩によってもたらされる技術者自身の人間性と能力に対する弊害を含めて、「人間」を対象とする建築のあり方をよくよく検討していかなければ、いずれは長年に亘り培われてきた人間性や技術の喪失を招くのではないかと危惧しています。

技術はそれを用いる人間の人間性によって生きも死にもします。大学は、豊かな人間性と技術力を備えた、将来の日本を背負う人材を育成していく場でもあります。その大学へ入学してくる学生にも、世相を反映して「携帯文化」と呼んでもよいように携帯電話が普及し、学生生活の大きな部分を占めており、勉学上はもとより大学生生活の人間形成に大きな影響を及ぼしていると思われれます。一方では、近年のハイテク技術の進歩により、誰でも極めて簡単に情報を得ることができ、また、簡単に結果を求めることができる様になると、内容の理解よりも機械操作そのものを覚えることに興味を示し、そのためにマニュアル化された一方的な思考回路に沿って機械に使われていることを良しとする傾向が現れてくるように思われます。現在のように明日が見えない混沌とした時代なら、なおさら様々な角度から物を見る思考方法を身につけなければなりません。テクノロジーにより機械の情報処理能力は高速化されてきましたが、人間の様々な能力の開発はそのようには行きません。学生達の大学入学後の人間形成には、試行錯誤によって多くの時間と労力が必要であることは身をもって知っていることです。「人間」を対象とする「建築」という分野で学問を学ぶためには、「人間的に豊かな生活」を送るための「専門技術の修得」でなくてはならず、大学教育では「時間」と「労力」をかけてそのような人材を育成することが重要であると思っています。

厳しい建設業界の中で、どうか同窓生の皆様にとって真の技術とは何かを考えていただき、互いに助け合いながら困難を乗り越えていっていただきたいと思っております。

# 第27回五三会建築設計競技結果報告 27th ITUMIKAI COMPETITION

課題： 公・共の場 ～都市の広場～

新テーマの下、2回目となりました本年度事業は、広島大学工学部助教授で建築家としても様々な場面で活躍の岡河眞先生に審査をお願いしましたところ、ご多忙にも関わらず快くお引受け下さりました。

昨年度から新たにスタートした、「広島のふれあいの場を考える」というメインテーマの下、本年度は「公・共の場～都市の広場～」と題して、作品を募集しました。

昨年12月18日に応募締切を迎え、広島工業大学をはじめ、諸大学、高専から、五三会建築設計競技史上最多の計47作品にも及ぶ力作が寄せられました。

一週間後の23日に鶴学園広島校舎において、応募された学生の方々など50名以上が見守る中、公開審査会が執り行われました。

また、岡河先生におかれましては応募作品一つ一つに講評を与えながら、非常に丁寧な審査をして頂きました。応募総数の多さもさることながら、どの応募作品も力作揃いで甲乙つけ難く、大変悩まれたご様子でした。審査結果は別記の通りとなりました。

入選の皆さん、おめでとうございます。

残念ながら誌面の都合により、ここでは入選作品の紹介のみに留まらせて頂きますが、応募された作品はどれも、一生懸命に取り組まれた様子が感じられました。また、一組で複数の提案をされる方々がいらっしゃるなど、この設計競技或いは課題に対する学生の方々の姿勢を目の当たりにし、大変嬉しく感じると共に心強く思いました。

昨年度同様、審査会終了後は岡河先生をはじめ、日頃公共の場に関する仕事をされている広島市職員の方々、設計の実務に携わっているの方々をお招きし、応募された方々との座談会を行いました。

応募作品を基に公共の場の在り方について応募者である学生諸君と、現実に実務として携わっておられるコメンテーターの方々との間で、熱のこもった論議が交わされたいへん有意義なものとなりました。

今後とも、この設計競技がより発展していきますよう、皆様方の一層のご理解とご協力をお願い致します。

最後になりますが、岡河先生にはこの建築設計競技事業にご理解を頂き、ご多忙の中審査、講評そして座談会にと貴重なお時間を割いて頂きましたことお礼申し上げます。

ご協力ありがとうございました。

以上にて、本年度建築設計競技事業の報告を終わります。

建築設計競技事業委員会



## 入選発表(敬称略)

## 一等賞 M&amp;m

田岡 博之・石川 誠・長田 典之  
 中平 順也・横田 健司・木内 英美  
 縄雅 貴靖・久安 邦明・益永 研司  
 横川 貴史・荒木 了・江田 清美  
 大津 絵美・亀山 和也・谷尾 尚隆  
 藤森 雅彦・前田 崇文  
 (広島工業大学環境学部)

## 一等賞 中山 大二郎・山田 晃

(広島大学大学院 岡河研究室)

## 一等賞 河野 友紀

(呉工業高等専門学校専攻科  
 建設工学1学年)

## 二等賞 秦 敏彦・山崎 大智・工藤 一顕

堀田 賢二  
 (広島大学工学部建築計画学教室)

## 二等賞 M&amp;m

田岡 博之・石川 誠・長田 典之  
 中平 順也・横田 健司・木内 英美  
 縄雅 貴靖・久安 邦明・益永 研司  
 横川 貴史・荒木 了・江田 清美  
 大津 絵美・亀山 和也・谷尾 尚隆  
 藤森 雅彦・前田 崇文  
 (広島工業大学環境学部)

## 二等賞 白井 義雄 (広島工業大学)

## 二等賞 M&amp;m

田岡 博之・石川 誠・長田 典之  
 中平 順也・横田 健司・木内 英美  
 縄雅 貴靖・久安 邦明・益永 研司  
 横川 貴史・荒木 了・江田 清美  
 大津 絵美・亀山 和也・谷尾 尚隆  
 藤森 雅彦・前田 崇文  
 (広島工業大学環境学部)



## 三等賞 上田 英史・小林 要

(広島大学大学院工学部建築学科  
 修士課程岡河研究室)

## 奨励賞 石原 啓之 (広島大学)

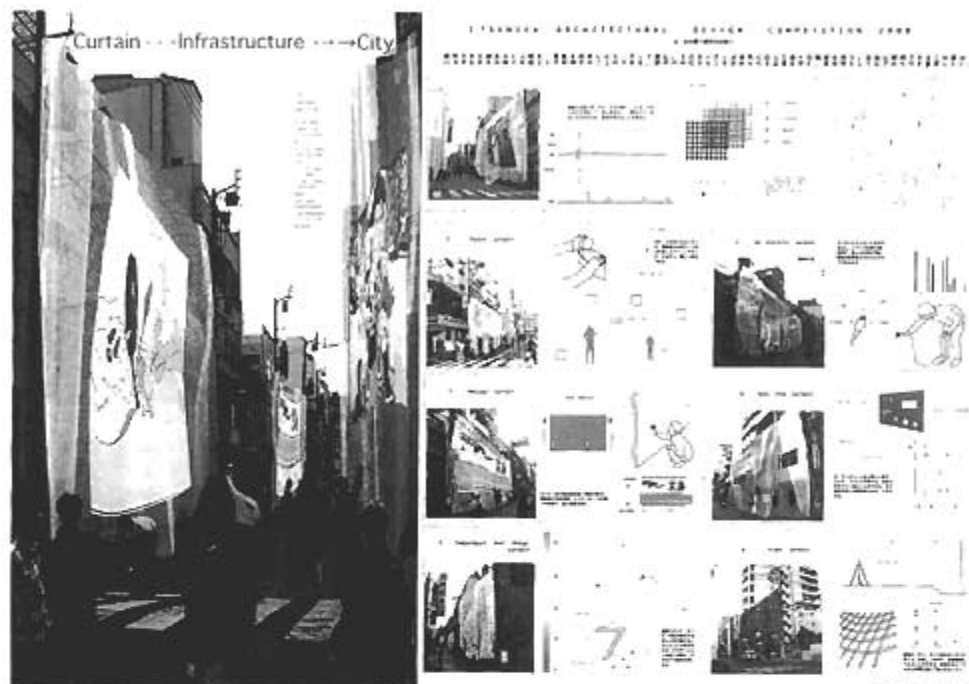
奨励賞 安井 裕之・山名 健介・嶋渡 克顕  
(広島工業大学福田研究室)

## 奨励賞 M&amp;m

田岡 博之・石川 誠・長田 典之  
 中平 順也・横田 健司・木内 英美  
 縄雅 貴靖・久安 邦明・益永 研司  
 横川 貴史・荒木 了・江田 清美  
 大津 絵美・亀山 和也・谷尾 尚隆  
 藤森 雅彦・前田 崇文  
 (広島工業大学環境学部)

奨励賞 大藪 博史  
(広島大学工学部第四類  
 建築学課程)奨励賞 前原 正隆  
(近畿大学工学部建築学科4年)特別賞 江本 晃美  
(呉工業高等専門学校  
 建築学科5学年)

## 特別賞 花本 大作 (広島工業大学)

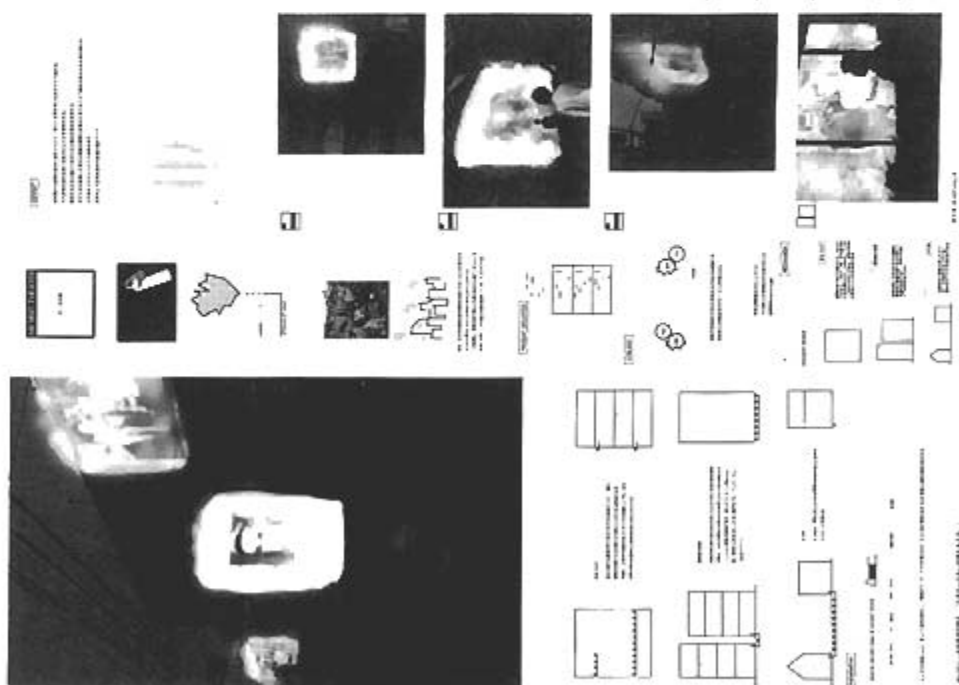


一等賞

M&amp;m

田岡 博之・石川 誠・長田 典之・中平 順也・横田 健司・木内 英美  
 縄稚 貴靖・久安 邦明・益永 研司・横川 貴史・荒木 了・江田 清美  
 大津 絵美・亀山 和也・谷尾 尚隆・藤森 雅彦・前田 崇文

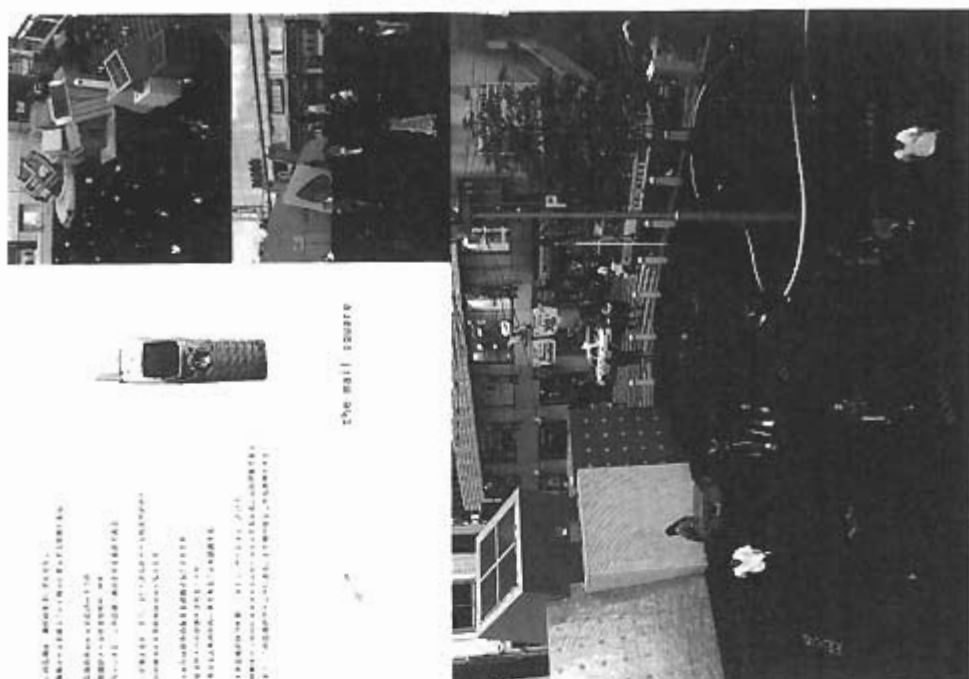
(広島工業大学環境学部)



一等賞 中山 大二郎・山田 晃

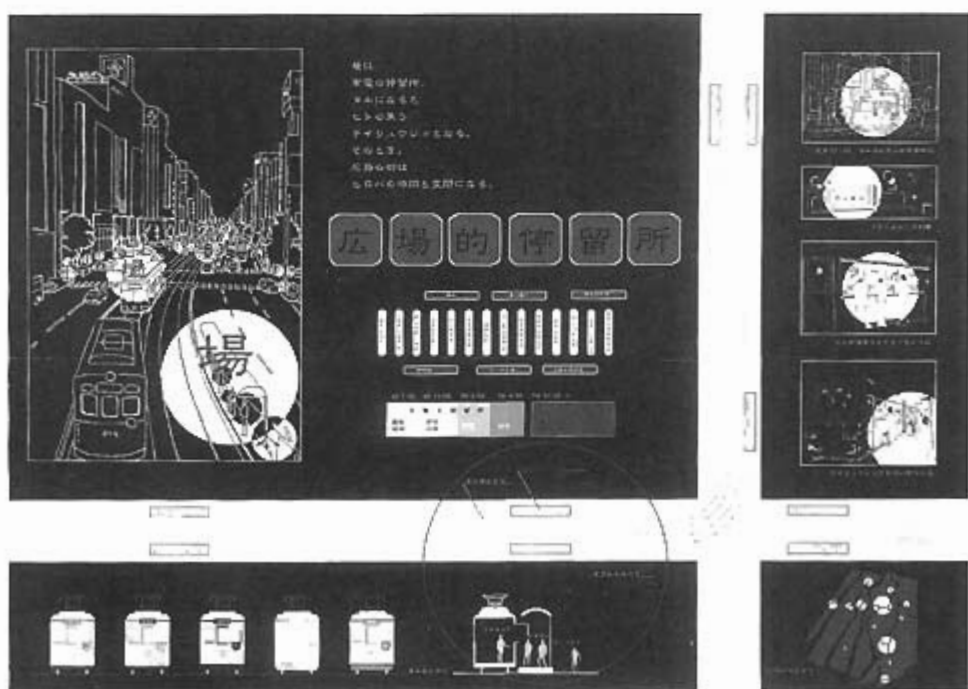
(広島大学大学院岡河研究室)





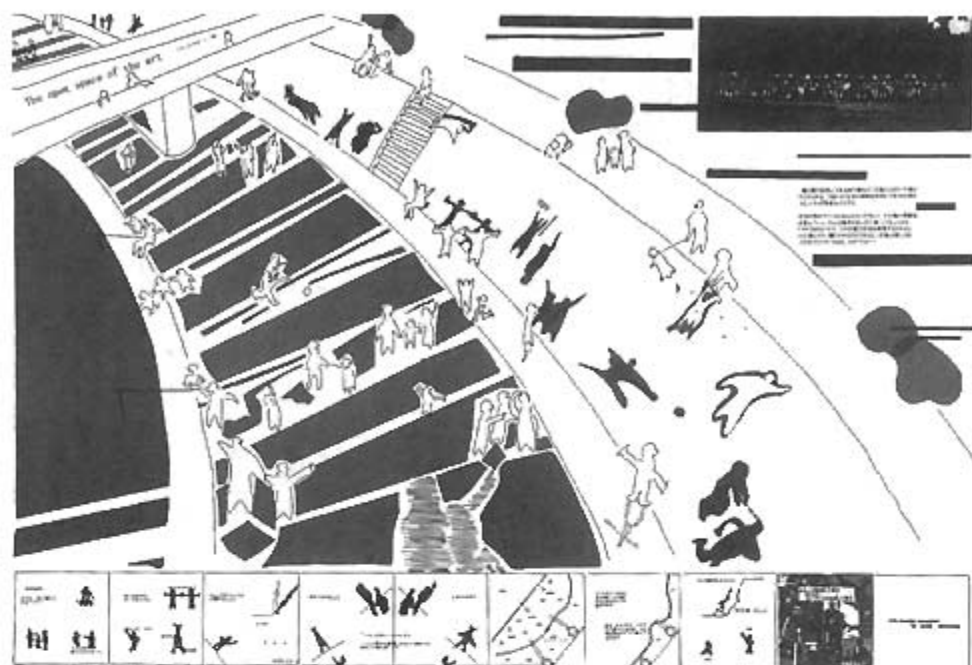
一等賞 河野 友紀

(呉工業高等専門学校専攻科建設工学1学年)



二等賞 秦 敏彦・山崎 大智・工藤 一顕・堀田 賢二

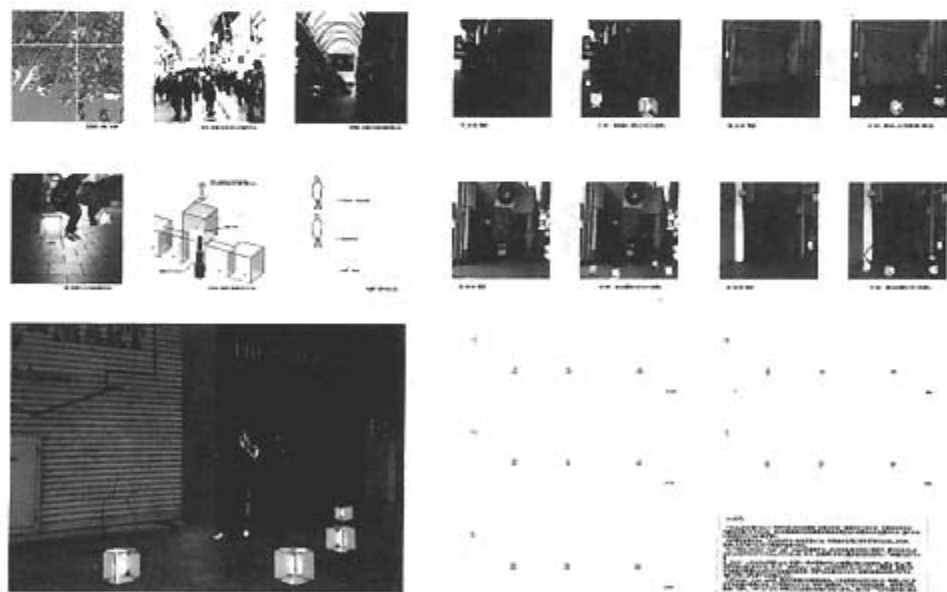
(広島大学工学部建築計画学教室)



## 二等賞

M&amp;m

田岡 博之・石川 誠・長田 典之・中平 順也・横田 健司・木内 英美  
 繩稚 貴靖・久安 邦明・益永 研司・横川 貴史・荒木 了・江田 清美  
 大津 絵美・龟山 和也・谷尾 尚隆・藤森 雅彦・前田 崇文  
 (広島工業大学環境学部)



## 二等賞 白井 義雄

(広島工業大学)



27th ITUMIKAI DESIGN COMPETITION (2016年10月 - 2017年10月)

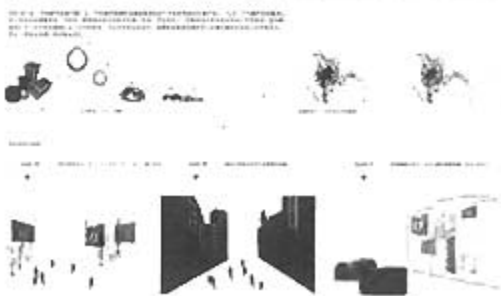
## 二等賞

M&amp;m

田岡 博之・石川 誠・長田 典之・中平 順也・横田 健司・木内 英美  
 縄雅 貴靖・久安 邦明・益永 研司・横川 貴史・荒木 了・江田 清美  
 大津 絵美・亀山 和也・谷尾 尚隆・藤森 雅彦・前田 崇文  
 (広島工業大学環境学部)



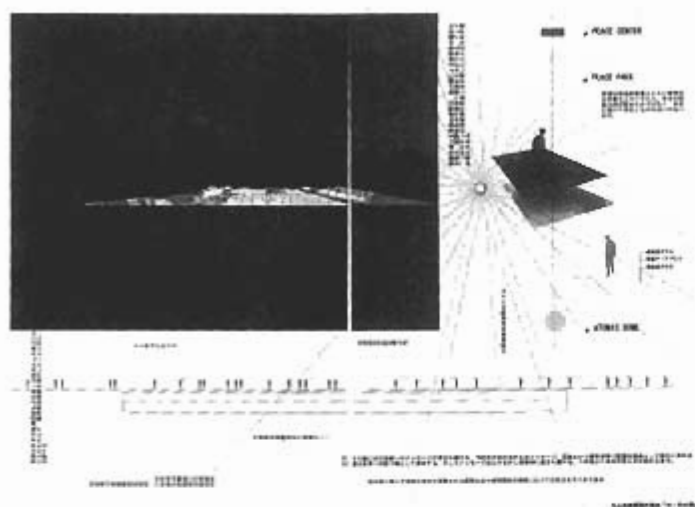
Softened Spirits



## 三等賞

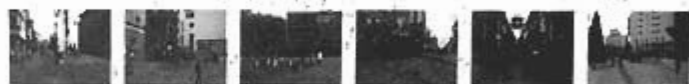
上田 英史・小林 要

(広島大学大学院建築学科修士課程岡河研究室)



## 奨励賞

石原 啓之 (広島大学)



## 奨励賞

安井 裕之・山名 健介

鳴波 克顕

(広島工業大学福田研究室)



## 奨励賞

M&amp;m

田岡 博之・石川 誠

長田 典之・中平 順也

横田 健司・木内 英美

縄雅 貴靖・久安 邦明

益永 研司・横川 貴史

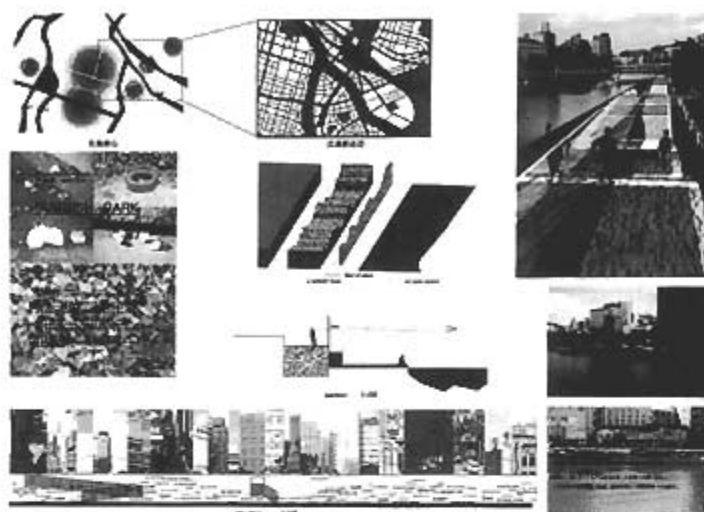
荒木 了・江田 清美

大津 絵美・亀山 和也

谷尾 尚隆・藤森 雅彦

前田 崇文

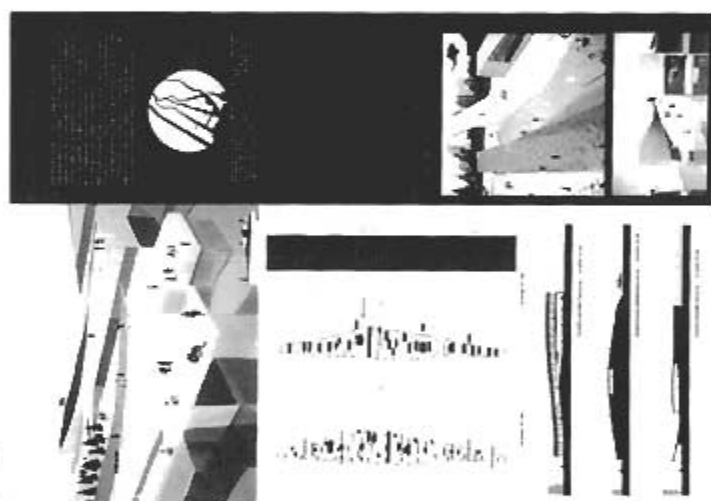
(広島工業大学環境学部)



奨励賞

大藪 博史

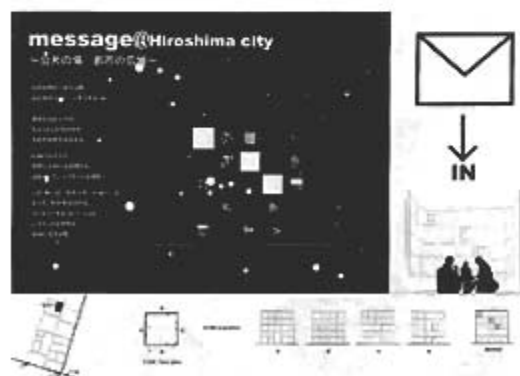
(広島大学工学部第四類  
建築学課程)



奨励賞

前原 正隆

(近畿大学工学部  
建築学科4年)



特別賞 江本 晃美

(呉工業高等専門学校建築学科5学年)



特別賞 花本 大作

(広島工業大学)

建築家・広島大学工学部 助教授 岡河 貢

今回の五三会のコンペは過去最高の47の応募がありました。会場に展示されていた応募案の全てがなんらかの魅力と建築的な提案をそなえたものであったことは驚きでした。しかもプレゼンテーションのレベルはすでに全国的なレベルのものがほとんどであり広島大学の学生の建築のレベルの高さに頼もしいものを感じました。

公共の場という課題にたいしての提案をどのように評価するかということについてあらかじめ私なりに整理をして審査にのぞみました。公共の空間という概念について西欧の広場の概念が無い私たちの都市空間の文化のなかに、私たちの独自の公共空間を提示しているもの、現代のコミュニケーションテクノロジーが作りだす新しい公共空間を提示しているもの、広島という地域の独自性のある公共空間を提示しているものを、評価しようとおもっていました。

一等に選んだM&mグループ(田岡博之、石川誠、長田典之、中平順也、横田健司、木内英美、細雅貴靖、久安邦明、益永研司、横川貴史、荒木了、江田清美、大津絵美、亀山和也、谷尾尚隆、藤森雅彦、前田崇文)のcurtainは建築と都市空間である道路の境界の面を再定義することによって新しいコミュニケーションの空間としての公共の場を提示しています。身近な都市のインフラストラクチャーである電柱を利用してたった一枚の布で都市空間そのものがコミュニケーションのための公共の場に変容しています。ここに描かれた通りのイメージは十分現実になっても楽しそうなりアリティを持っています。みじかによくしっている広島の通りが簡単な布製の装置によっていままでもたことのない都市空間にかえられています。

おおげさな構築物をつくらなくても都市空間を楽しく変容させるのは若い世代のリラックスした思考としてとても感心しました。

同じく一等に選んだ中山大二郎、山田晃のAIR MIST THEATERは都市環境としての

空気と水蒸気を題材としているところに新鮮さを感じました。空気という環境をいままでも公共空間の媒体として取り扱った提案はみだることがありませんでした。21世紀は環境の世紀であるといわれていますが環境こそは公共性をもっとももっているにもかかわらず、建築が空気を主題にしてこなかったことに対して鮮やかな提案がなされています。水蒸気に写し、出される映像はおそらくホログラフのような新しい映像の存在感を都市空間のなかに作りだしていきましょう。

私は20世紀の建築の材料が鉄とガラスとコンクリートであったなら21世紀には空気も建築の材料になるであろうと思っていました。その意味で環境であり、公共媒体である空気を題材にしたこの案にひきつけられました。

同じく一等に選んだ河野友紀のthe mail squareは携帯電話というコミュニケーションテクノロジーの個人化に対応した新しい公共の場として飛び交う言葉の断片が広場の舗装に写し出されるというものです。携帯電話やE-mailは個人と個人のコミュニケーションを飛躍的に拡大しているにもかかわらず、それらをむすびつけている電波は目にみえないためにコミュニケーションの場は公共空間として視覚化されていません。見えない公共の場を視覚化しているという意味でこの提案の切れ味は魅力的でありました。



二等に選んだ秦敏彦、山崎大智、工藤一顕、堀田賢二の広場の停留所は広島の地域性としての路面電車を都市の交通システムとしてのプログラムからコミュニケーションのための空間へのプログラムの変更の提案です。路面電車は近代的交通システムであるにもかかわらず、広島では地域の独自性の要素としての都市施設であります。これをただ単に交通手段としてのみ利用するのではなく公共の場としてのコミュニケーションのための空間をすこしのんびりしたユーモアのある提案としたところに魅力を感じました。

同じく二等に選んだM&mグループのThe open space of the artも広島の地域性としての河川空間を公共の場としてとりあげています。河川敷に人の形を記述する芸術行為を公共の場のためのモチーフとした楽しさが図面全体からつたわかりました。手書きの図面ならではの手づくりの図面と手づくりの空間が好ましいプレゼンテーションになっています。

同じく二等に選んだ白井義雄のHondori music park projectも広島の地域性としてアーケードのある商店街で行われている音楽活動に対する提案として、現実化の可能性のあるものとして評価しました。商店街の通りは広場の文化をもたない私たちの都市空間の公共の場としてさまざまに使われることのできる可能性をもっています。実際に広島本通り商店ではシャッターが閉められた夜に若者達が音楽を演奏しています。このような活動をサポートするものとしてこの提案は実現性のある優れた提案だとおもいます。

同じく二等に選んだM&mグループのthe ballon of the amount of passageは広場に空気でふくらませる風船のようなストラクチャーを装備して広場空間を様々な形でつかわれるようにしたものです。このような簡単でも魅力的な装置が広場空間を固定化せず、都市の状況に応答しながらふくらんだりしぼんだりする新しい空間の提案として評価しま



した。

三等に選んだ上田英史、小林要のSoftened Spiritsは被爆都市としての広島という重い課題を公共の場とするために光を素材とした都市的パフォーマンスとして空間化する提案です。このような重い主題を公共の場という概念として提示したことを評価しました。

このほかにも5作品を奨励賞2作品を特別賞として選びました。これらは入賞作品とほとんどかわらない魅力的な提案でした。さらに建築的な思考と感受性をたかめてくださることを期待します。

全体に今回の応募案はレベルの高い提案が多数あり、選択に苦勞をしました。広島から新しいそして独自の建築がうまれることを期待できる若者たちの提案に接して、さらに私も建築の未来を切り開く努力をしてゆきたいと思います。

## 在学生から一言

在学生の方々から  
学生生活について聞いてみました

### 「しゅうまい」

環境デザイン学科 田岡博之

建築学生が腕試しにとコンペに参加するのは、おそらく広工大が創立された頃からも変わらず続いているのではないのでしょうか。その頃に比べ、現在では数も増え、様々なコンペが行われています。その中で私達工大生にとって、とても身近なものが、五三会建築設計競技です。

毎年このコンペに参加することが、私を含め周りの学生の中で1つのイベントとなっています。学部生の立場から取り組むのは最後となりましたが、今回は総勢17名のグループで応募させて頂きました。学部一年生から院一年の先輩まで、工大フルメンバーの構成となっています。約半数が一・二年生で、コンペ初参加ですが、アイデアの提案から完成まで共同で進めました。光栄にも賞を頂くことができましたが、一・二年生の段階でこのような結果を出せたことは、彼らにとっても今後の大きな励みになるはずです。今回、過去最多応募数を記録し、よりハイレベルな争いになっきているのを確信しました。それはこのコンペだけの話ではないと感じています。

広工大はここ数年で明らかに変わってきたように思います。建築を学ぶにあたり、これほど環境に恵まれた大学は全国でもそうありません。実際にモノづくりをしておられる建築家の方々に教わり、多くの刺激を得ることができました。ゼミ室等の施設についても他大学にはないほどのスペースが確保されています。しかし、それに応えるだけの活気には物足りなさを感じます。学生からの発言や活動がもっと起こってくるべきだと思います。

現在、私が参加している活動に「毎週住宅を作る会」(以下「しゅうまい」)があります。文字通り毎週住宅を各自提案しています。建築が好きなら誰でも参加OKで、他大学の人を交えてのしゅうまいもありました。去年の先輩から始まり、3年目となりましたが、図面や模型の総数は数百にもなります。第一回

のとき、私は二年生でした。まだ住宅が何なのかも掴めず、手探りで図面を引いていましたが、もっとおもしろいものをつくりたいという思いと、集まった仲間からの刺激が自然と技術を高めてくれました。本になるほどの図面が自分の作品に加わることは大きな強みだと思っています。今回の五三会のコンペもそうですが、ここから発展し、評価を得ることができた案も多くあり、しゅうまいの可能性を示すことができたのではと思っています。このような活動は、大学生活を楽しくする1つのアイデアだと思います。私たちは建築が好きで、ここで住宅という形を取っていますが、もっとあちこちでアクションが起き、お互いに影響し合っていければと考えています。今年、オリゼミに指導学生として参加しましたが、一年生のほとんどがデザインを学びたいといった、明確な意志を持ってこの大学に来ていました。これからの広工大に期待しつつ、私もOBとして何か刺激を与えていければと思っています。





## 「学生生活」

大学院 環境学研究所・地域環境科学専攻  
河野壯史

大学入学当初は、建築というものに漠然とした憧れを持っていた。そうした中で、製図実習などが次第に進むと線を描くことの面白さを感じたが、同時にその難しさも幾らか分るようになった。また、友人らの図面を見ては、自分では考えつかない発想に圧倒されたりもした。

3年次のゼミ選択の時、建築に対する一方的な憧れから、次に自分が一番興味をもっているのはどの分野なのか考えることとなった。図書館の書籍を読んでみたり、既往論文に目を通したりもした。そこで最も興味をもったのが都市計画の分野であった。しかし、その時に都市計画の何に惹かれたのかは、正確には覚えていない。

私が現在の研究テーマであるまちづくり活動に出会ったのは、3年のゼミの時に紹介された、あるまちづくり活動がきっかけになっている。この活動は現在も参加させていたが、初めて参加させていただいた時の衝撃は今も忘れられない。

10数人の関係者が、真剣な中で時々笑いの聞こえる雰囲気の中、商店街の活性化について話を進めていた。しかし、話合も終わりに近づく頃、ちょっとした点(しかし重要な点)で理解の相違があり、関係者同士お互い怒鳴り合いに近い議論になってしまった。

初めての経験であったため、非常に居づらい状態であったが、よくよく聞いていると野次や罵声といった類ではなく、自分の意見を正面からぶつかり合わせているのであった。その後、納得のいくまで話合いは進められ、次に参加させていただいたときには、良好な雰囲気の中で議論は進んでいった。

このとき感じたのは、地域の人が本気でまちの将来を考え、自らの意見をぶつけ合いながらより良い解決の道を探っていくことという真剣さと力強さであった。非常に人間くさく、

時間のかかる活動であることは容易に理解できたが、非常に興味をひかれる活動であった。

こうしたきっかけからまちづくり活動に興味を持ち、その後も幾つかのまちづくり活動に参加させてもらいながら、研究を続けている。しかし、どこの誰かも分からない人物に参加させてくれるところはなく、菅原教授をはじめとしてコンサルタント等でご活躍の諸先輩方にまちづくりの現場を紹介していただくなど大変お世話になっている。こうした体験から、自分ひとりでは何も進められない無力さと同時に、工大O Bの諸先輩方の幅広い分野でのご活躍とその存在の力強さを認識することとなった。

また、学部・大学院問わず多くの人と話す機会があったが、特に学部を卒業すると、周囲の人から建築分野について色々質問されることも出てきた。環境デザイン学科を卒業したことを意識させられるとともに、周囲からは建築を学んだ者として幅広い知識を求められていることを改めて認識することとなった。

今後は研究を進めていくとともに、その過程で得られた貴重な経験を社会に出ても活かせるよう努力していきたいと思う。



## 「学生生活について」

建設工学科 建築工学コース 中村真樹

広島工業大学の建設工学科に通い初めて早くも4年目が過ぎようとしています。就職活動の自己分析以来、大学生活を振り返る機会を与えられたのが今回で2度目です。振り返ってみて最初に頭をよぎる思いは、大学という機関にもっと貪欲に踏み込んでおけばよかった、という反省です。

私は、福祉・医療施設に関する建築に対し興味を抱いていたので、大学の授業だけでは学ぶことのできない現場を覗いてみよと、課外活動に多く参加していました。活動から学ぶことは多々ありました。ニュースや本や情報専門誌などに書かれていない、あるいは書くことのできない福祉現場の状況。施設の運営者・介護者・介護を受ける者・その家族…と違う立場の人々の主張。また、活動を通し、人脈が広がることによって、仕事観・人生観など多様な考え方を聞かせて頂くことができました。

しかし、大学の授業で教わる建築の基礎知識もあやふやな状態で、その基礎知識を踏まえないと理解できるはずのない福祉・医療建築に執着するのは非常におこがましいことだということに気付きました。気付いたというよりも、大学の教授からの助言により気付かされました。「福祉だ、バリアフリーだと言う前に、根本的な建築の知識や経験を積み、土台をつくれ。それからの話だ。」という教授のお言葉に、目から鱗が落ちました。福祉現場を見たり、そこに関わる人々の話を聞いたりしても、結局、その分野を私の狭い視野で表面的に理解していただけた、ということが分かりました。

教授のこのお言葉は、働くことの目的を考える際にも、大きな指針となりました。私は「障害者・高齢者を含む多くの人に当然の生活を送ることができる建物を提供すること」を最終目標にしていました。この目標ができたのは次のような理由からです。阪神・淡

路大震災の時、高齢者・障害者対応仮設住宅が、設備不十分で普通に生活を送ることが困難な状態だった人もいた、という報告に衝撃を受けたことが始まりです。仮設一つをとっても、たとえ緊急時で贅沢をいえない状況においても、障害のなる人も普通に生活できる環境を受ける権利があると思いました。日本の福祉は“保護”や“救済”と捉えられがちですが、“人権”と“権利性”という視点で捉えていく必要があると思います。その視点がこの時の仮設住宅には欠けており、この仮設住宅に関わらず現存する建物の多くも同じような状況です。

就職活動中もこの目標に固執して、福祉事業部がある会社を主に探していました。ところが、皮肉にも内定をもらった会社がこの阪神・淡路大震災時の仮設住宅を提供した会社だったのです。しかし、逆をとれば、改善するチャンスが舞い込んだのだと思いました。

この頃私はまだ企業に入社したらずくに福祉部門で働きたい、ほかの事業部では自分の目標から遠ざかってしまう、と思っていました。しかし、教授の言われたように、個人的で自己中心的な理念や目標を主張する前に、やるべきことをやっていたら、おのずと目標に到達するのだと考えたら、どんな職種で、どこの事業部で働こうとも自分の血となり肉となる事に気付きました。

何十年か後のその目標に向かって、建築の基礎となる経験や知識を身に付けていくことが働くことの意味ではないかと思っています。働いていく中で、この最終目標に常に疑問を投げかけ、違うと思ったら新しい方向性を模索していける正しい知識と適切な判断力を養っていきたいです。

# 発表 『五三学生会大賞』

環境デザイン学科

田 岡 博 之 (村上ゼミ)

テーマ

「サブ・カルチャーセンター」

## 〈五三学生会大賞〉

### 賞の内容及び対象者

卒業年次における環境デザイン学科・土木（建設）工学科学生のうち、その年度において卒業研究又は卒業設計が優秀と認められた者

- ・環境デザイン学科 若干名
- ・土木（建設）工学科 若干名

（最大6名まで）

**審査方法** 広島工業大学教員の推薦を受けた作品の中から、「五三会顕彰制度認定委員」が選定する

**賞・賞金** 受賞者には、賞状および記念品を授ける

**受賞式** 卒業式当日 広島工業大学にて

- 付 則**
- ・顕彰予算は、総額3万円程度とする
  - ・本内規は、平成8年度より施行する

## 編集委員会の活動

「五三会」各委員会の活動内容を紹介することになり、まずこの会報誌を編集しますこの「編集委員会」の紹介からさせていただきます。

編集委員会は前回の副幹事長による紹介のとおりこの会報誌の発行のために、母校の建築・環境系学科の近況や、「五三会」の1年間の活動記録を、先生方や各委員会の寄稿によって編集しています。

### 編集スケジュール

- 4月 前年の反省会
- 9月 会報誌の内容検討
- 10月 原稿依頼
- 12月 原稿回収
- 1月 編集
- 2月 校正・印刷
- 3月 発行

毎年、このようなスケジュールで作業が進めばわたしたちの活動もかなり楽になるのですが、原稿の中には広告原稿も含まれていたり、その他にも印刷直前になるまで回収できない原稿もあったりして、年が明けてからの作業がほとんどになるというのが現状です。

五三会の幹事のメンバーを見てもらうとわかると思うのですが、幹事の若返りを図ったといえば聞こえはいいのですが、実際のところどうなのか疑問に思います。

編集委員にしても、以前編集委員を経験した人はみんなと言っていいほど五三会から離れているように思うのはわたしだけでしょうか。

五三会の幹事の任期が3年というのをご存知でしょうか？

各幹事会の任期はないのでしょうか？

もし、わたしたちがそろってドロップアウトしたら…などと考えないわけではありません。現在のメンバーは4人ですが、全員平成4年卒業以降のメンバーです。

もっと幅広い年代のメンバーであれば、今よりも充実した内容になるだろうか。

わたしが編集委員長として作業を頼みやすいメンバーで活動をしていたのと、頼んだとしても今はこのような活動をするヒマがないと言って断られたりと結局このメンバーでここ数年は作業をしているというわけです。

決してわたしたちはヒマだからこの編集委員会の活動をしているわけではないのですが。

それでも、少しでも楽しく作業できないかとわたしたちなりに、頑張っているのです。

会報誌の内容について色々な批判や意見があると思います。

そのような方は遠慮なく申し付けください。今後の会報誌作成に参考にさせていただきよりよい会報誌をお届けできるようにしていきたいと思っています。

そして、わたしたち以外にも会報誌を編集してもいいという方が現れてくれることを祈っています。



## メンバー紹介

寺尾 慈子 (平成4年卒業)

編集委員になったきっかけは、就職して最初の担当物件の設計が当時の五三会会長の事務所で、記念事業をするにあたり何か事業委員会の仕事をするように、勧められて選んだのが記念誌編集委員だったこと。その委員会のメンバーにわたしの卒研の指導教員であった森保先生がいらしたので、ついその委員会を選んでしまった。それ以来なぜかわただけがこの会報誌の編集まで続けてしまっているのです。

1度、結婚を期に五三会の幹事を「寿退会します」とか言ったが認められず、出産を期に今度こそと思っていたのになぜか未だに編集委員に名を連ねているのです。

高野 栄一 (平成4年卒業)

建築技術設計事務所勤務

在学中から五三会には特に縁は無かったのですが卒業後、Tさんが一人で会報誌の編集委員をしているから手伝ってほしいと頼まれたのをきっかけに(本当は一年だけだと思っていた)いつの間にか編集委員になっていました。編集委員は4人中3人が平成4年卒業生の為、このまま新しい人が参加してくれないと、会報誌は消滅してしまうのではないかと心配しています。昨年は新メンバーが一人参加してくれたのですが半年も経たないうちにいなくなりました。

ここまで書くとなんとなく大変そうに思われますでしょうが、年に一度旅行にいったり、同窓会も兼ねているようなところもあるので案外楽しいところもあるんですよ。ですから今年是非、意欲の有る方は年齢性別を問いませんから参加して下さい。よろしくお願ひします。

原尻 忠始 (平成4年卒業)

建築技術設計事務所勤務

卒業以来、五三会に入会していたにもかかわらず、なぜか会報誌が手元に届くこともなく「五三会」の存在すら頭の中から消え去っていたころ、当時編集長であったTさんから「甘い言葉(?)」にのせられ、いつのまにやら編集委員に。

以来、秋が深まるころになると、春の会報誌発行後の“自費”での打ち上げと、この会報誌が届く会員の皆さんに1ページでも1文字でも多く、目を通してもらえるような会報誌になることを目標に編集作業に取り組んでいます。

三好 征一 (平成9年卒業)

藤村田相互設計事務所勤務

卒業して4年になりますが、卒業以来ずっと編集活動にたずさわっています。始めたころは、人数も多くて作業量も分担でき、時にはみんなで飲みに行ったり、楽しかったのですが、だんだん人数も減り、前編集長のめでたい出産のため、いつの間にか編集長になってしまいました。現在、たった4人で、めったにない休日をつぶして編集作業に取り組んでいます。

今回の会報誌で編集委員になって2回目となりますが、若い編集委員長で、会報誌の内容が“いまいち”という言葉が聞かれる中で、自分なりにがんばっているつもりです。この状態を変えるためには、五三会の会員の皆様の力が必要です。ぜひ、何か意見があるとか、手伝って頂ける方がいらっしゃるのであれば、御連絡下さい。

これから、この4人がいつまで続けていけるかわかりませんが、1年間の五三会の動きが少しでも伝えることができる会報誌を作っていきたいと思ひます。よろしくお願ひ致します。

# 五三會

# 活動報告

幹事長 三島久範 (S60年卒)

## 平成12年度の主な活動

- 4月  
平成12年度 五三會總會・懇親会
- 5月  
第1回幹事会
- 6月  
五三會新入会員歓迎会の開催
- 8月  
第2回幹事会  
五三會ゴルフコンへの開催
- 10月  
第3回幹事会
- 12月  
五三會設計競技の表彰  
第4回幹事会
- 1月  
五三會新年会の開催  
第5回幹事会
- 2月  
顕彰制度(学生大賞)の審査  
新入会員入会申込書の送付  
第6回幹事会
- 3月  
第7回幹事会  
顕彰制度(学生大賞)の表彰

## 平成12年度役員

(会 長)	山野 正晴	(昭和54年卒)
(副 会 長)	梶山 孝之	(昭和49年卒)
	落合 木堂	(昭和56年卒)
(会 計)	田中 義登	(昭和63年卒)
	木下 和夫	(昭和63年卒)
(会計監査)	松田 智仁	(昭和55年卒)
	神垣 聡志	(昭和61年卒)
(書 記)	奥野 功貴	(平成4年卒)
	小瀧 宏治	(平成6年卒)
(幹 事 長)	三島 久範	(昭和60年卒)
(副幹事長)	平田 欽也	(昭和60年卒)
(顧 問)	三上 明夫	(昭和44年卒)
	中島 伸夫	(昭和49年卒)

五三會設計競技では、昨年度から、広島の公共の場を考えるためのテーマを設定しており、その第2回目に当たる今回(第27回)は、「公・共の場を考える ～都市の広場～」というテーマで設計競技を開催しました。

開催内容は、20世紀の最後を締めくくるに相応しい作品が47作品も集まるといいうれしい結果となり、今回、審査員を引き受けてくださった広島大学の岡川先生からも、高い評価をいただくことができました。

また、審査会の後の座談会では、岡川先生や、現在、社会で活躍しておられる専門家方々(行政関係者、建築家等)、設計競技に参加した学生と一緒に、次世代の広島の公共のデザインについて考える会が持たれ、その会の終わりには、岡川先生から「もっと、このような会を多く開催し、広島の都市デザインの情報源として活かしてはどうか」というご提案があり、それについての賛同意見が交わされました。

幹事会としては、このような皆さんの思いに合わせて、今後とも、社会につながる創造活動の場を企画し、運営していきたいと考えておりますが、何分、時節柄、追い風に会わうことができず、現在、資金不足、人手不足に苦慮しております。

これからも五三會の活動を向上させていくためには、卒業生並びに関係者の方々の更なるご尽力が必要となりますので、今後とも、ご支援、ご協力の程よろしく申し上げます。

平成12年度幹事会スタッフ一同

## 五三會事務局

〒731-5193  
広島市佐伯区三宅2丁目1-1  
広島工業大学環境学部環境デザイン学科  
菅原研究室内 TEL082-921-3121

## 五三会収支決算報告

### 平成12年度収支決算報告

(平成13年3月1日現在)

◆収入の部	(単位 円)	
繰越金	5,732,540	
新会費	878,740	
広告料	358,950	
利息収入	442	
合計	6,970,672	
◆支出の部	(単位 円)	
会議費	49,930	
バイト	98,000	
名簿作成	13,209	
印刷	14,700	
金融機関手数料	140	
雑費	9,559	
会報誌印刷	550,000	
会報誌郵送	205,440	
会報誌取	0	
設計競技	334,118	
企画活動	50,000	
新学生会員歓迎	18,007	
学生大賞記念	10,971	
予備費	7,262	
繰越金	5,609,336	
合計	6,970,672	

### 平成13年度収支予算(案)

◆収入の部	(単位 円)	
繰越金	5,609,336	
新会費	850,000	
広告料	310,000	
合計	6,769,336	
◆支出の部	(単位 円)	
会議費	70,000	
バイト	90,000	
名簿作成	10,000	
印刷	40,000	
金融機関手数料	1,000	
雑費	10,000	
会報誌郵送	550,000	
会報誌取	220,000	
会報誌取	30,000	
設計競技	320,000	
企画活動	30,000	
新学生会員歓迎	100,000	
学生大賞記念	30,000	
予備費	100,000	
繰越金	5,168,336	
合計	6,769,336	

## 建築学科記念事業基金収支決算報告

### 平成12年度収支決算報告

(平成13年3月1日現在)

◆収入の部	(単位 円)	
繰越金	1,587,424	
利息収入	1,234	
合計	1,588,658	
◆支出の部	(単位 円)	
雑費	0	
在学生交流	63,000	
在学生助成	0	
繰越金	1,525,658	
合計	1,588,658	

### 平成13年度収支予算(案)

◆収入の部	(単位 円)	
繰越金	1,525,658	
合計	1,525,658	
◆支出の部	(単位 円)	
雑費	10,000	
在学生交流	100,000	
在学生助成	150,000	
繰越金	1,265,658	
合計	1,525,658	

# 広島工業大学建築・環境系同窓会 「五三会」会則

## 第一章 総 則

- 第 1 条 本会は広島工業大学工学部建築学科・同土木工学科建築工学コース・環境学部環境デザイン学科(以下、「建築・環境系」と称す)同窓会「五三会」と称する。
- 第 2 条 本会は、本部を広島工業大学内に置く。但し、総会で必要と認めた場合に支部を置くことを得る。
- 第 3 条 本会は会員相互の交誼を厚くし、かつ母校の建築・環境系学科の発展に貢献することを目的とする。
- 第 4 条 本会は前述の目的達成の為に下記の事業を行なう。
- (1) 集 会
  - (2) 会員相互の連絡並びに共助に関する事
  - (3) 会誌及び会員名簿の発刊
  - (4) 母校に対する精神的、物質的援助
  - (5) 会員の功績に対する顕彰
  - (6) その他本会の目的達成に必要な事

## 第二章 会 員

- 第 5 条 本会は下記の者を以て組織する。
- (1) 正 会 員 広島工業大学建築・環境系卒業生(大学院を含む)のうち会費を納入した者
  - (2) 準 会 員 正会員以外の広島工業大学建築・環境系卒業生  
広島工業大学建築・環境系在学学生(大学院生を含む)
  - (3) 特別会員 母校建築・環境系教職員及び旧教職員
  - (4) 名誉会員 本会の発展に貢献し、名誉会員としてふさわしいと総会で認められたもの

## 第三章 役 員

- 第 6 条 本会は下記の役員を置く。
- |          |          |           |    |
|----------|----------|-----------|----|
| (1) 名誉会員 | 置くことができる | (2) 会 長   | 1名 |
| (3) 副会長  | 2名       | (4) 会 計   | 2名 |
| (5) 会計監査 | 2名       | (6) 幹 事 長 | 1名 |
| (7) 幹 事  | 若干名      | (8) 書 記   | 2名 |
- 第 7 条 本会の役員は次の方法で決める。
- (1) 名誉会長は総会をもって推す
  - (2) 会長・副会長・幹事長・会計・会計監査・書記は総会で正会員の中から選ぶ
  - (3) 幹事は総会の決議により正会員の中から委嘱する



\*\*\*\*\*

- 第 8 条 各役員はそれぞれ次の任務を持つ。
- (1) 会 長 本会を代表し会務を総括する
  - (2) 副 会 長 会長を助け支障がある場合は代理する
  - (3) 会 計 会計事務に当たる
  - (4) 会計監査 会計を監査する
  - (5) 幹 事 長 会務を主宰する
  - (7) 書 記 書記事務に当たる

- 第 9 条 役員は任期は一年とし再任をさまたげない。但し欠員は役員会にはかり補充し、これによって就任した者の前任者の残りの期間とする。

#### 第四章 顧 問

- 第 10 条 この会に顧問は若干名をおく。
- (1) 顧問は総会の決議により適任者を委嘱する
  - (2) 顧問は会の諮問に応じる

#### 第五章 会 議

- 第 11 条 会議を分けて定期総会、臨時総会、役員会及び事業委員会とする。
- 第 12 条 総会は最高の議決機関で毎年 1 回開く。臨時総会は役員会が必要と認めた時、会長が召集する。
- 第 13 条 総会は次のことを決める。
- (1) 会則の変更と改正
  - (2) 決算及び予算
  - (3) 事業委員会の組織
  - (4) その他緊急事項の協議
- 第 14 条 役員会は会長が認めた時召集し、次のことを決める。
- (1) 総会に附議する原案
  - (2) この会の運営に関する諸事項
  - (3) 事業委員会の組織
  - (4) その他緊急事項の協議
- 第 15 条 事業委員会は必要に応じて役員により組織し、第 4 条に掲げる事業についてその事務を処する。
- 第 16 条 会議の議決は出席者の過半数をもって決定し、賛否同数の時は議長がこれを決定する。

#### 第六章 会 計

- 第 17 条 この会の経費は会費、寄付金及びその他の収入をあてる。  
正会員は終身会費として、入会時に 10,000 円を納入しなければならない。
- 第 18 条 この会の会計年度は 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

#### 第七章 委 任 事 項

- 第 19 条 この会則に定めのあるもののほか、必要な事項は役員会においてこれを定める。

#### 付 則

本会則は、平成 8 年度から施行する。  
旧会則で正会員であったものは、本会則における正会員に移行する。

# 2000年度 卒業生一覽表

氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
建設工学科 (建築工学科コース)	花本 大作	長田 典之	弘中 孝治	大本 直正	野島 友和
秋山 隼人	浜口 宗晴	越智 貴政	藤井 直子	岡田 猛	花川 僚一
安部 佳久	早川 善三	越智 良朋	藤本 健司	尾川 幸治	濱本 和代
新井 梨奈	榎上 陽介	尾本 昌也	古本 志徳	越智 友子	濱本 奈緒
有木 大勝	深井 純平	柏矢 敏幸	細 由香	小野 昌平	平岡 泰将
有田 茂	福迫 浩一	梶山 勉	松浦 春樹	楠本 洋平	広田 昌信
石井 強	福本 真之	上園 聡	三村 淑子	梶原 茂	福本 貴大
石原 正博	古島 崇	米山 栄作	宮崎 寛子	金尾 隆司	藤田 隆直
井上 惠善	堀田 和宏	桐山 清美	宮本 彰	加納 奈真	藤村 直博
茨木 善隆	増田 洋一	草山 佳治	村 上敏	河北 眞子	堀 丸山
上時 恵子	町田 親正	黒田 健勝	森下 賢治	賀張 英嗣	宮崎 幸治
白井 義雄	松尾 信幸	小林 弘和	山崎 忠士	吉川 晃	宮原 徹
内田 哲也	松川 武史	近藤 泰生	山田 宏樹	小新井 俊明	宮本 良志
岡田 朋成	松野 陽平	佐々木 崇志	山本 哲也	今 裕志	村上 隆志
奥平 博史	松本 忠士	佐々木 博志	山本 英子	酒井 聡	村上 高子
小幡 一博	三好 達也	笹谷 昌幸	油井 健司	佐々木 友武	森 隆一
香川 大輔	村田 景子	塩田 武志	横山 彩美	山野 栄至	山口 尚人
楮原 直子	目黒 航	新原 太郎	吉岡 英希	清水 正明	山瀬 浩子
梶川 浩史	森石 祥子	鈴木 良裕	石川 祐子	實末 祐紀	山田 美樹
片山 貴英	山崎 琢也	炭本 裕也	井口 敬三	隅田 裕之	山根 圭太
金山 隆治	山崎 雅仁	高山 武士	清水 領一	瀬戸 恵子	山本 智裕
河野 豊樹	山下 崇	滝口 貴士	日野 静枝	岡田 博	山本 功
河部 真理	吉田 優作	竹下 美鐘	和田 健吾	高木 啓太郎	横田 泰崇
木村 佑介	吉村 英希	田島 美幸	網中 智英	高橋 谷美	吉岡 浩子
坂井 伸好	和田 英知	田中 真行	日下 典子	竹内 仁志	吉田 崇
酒田 慎也	山本 俊明	田辺 八十雄	小松 良啓	竹原 聡	岡野 邦章
坂藤 千代	長谷川 剛	津島 春香	重田 英之	竹本 喬	出口 文純
佐々木 祐也	環境デザイン学科	富田 孝治	松島 花代	奄野 靖志	島山 孝一
清水 紀夫	青山 和司	中川 幸宏	青山 幸二	田中 啓道	和田 純二
下田 和宏	安藤 香織	中津 敏剛	秋部 哲史	田中 耕作	小谷 長彦
杉本 裕哉	池永 美絵	中原 史貴	粟屋 昇大	谷崎 正明	頃末 明男
住本 周平	石田 昭一	中村 詢音	飯尾 里子	佃 待子	藤本 崇信
田尾 伸一	市川 ひろみ	中元 操	石井 智子	坪井 重裕	上野 眞
高田 賢一	今川 浩司	永木 西琢	伊藤 尚之	友近 裕之	
谷口 雅也	上田 雄一	西崎 篤規	井上 大助	中西 知貴	
田村 友和	植野 広倫	橋本 喜裕	岩鼻 尚子	中平 順也	
寺本 和浩	宇田 佳嗣	花田 聖子	植田 美代	中村 健太郎	
中野 和史	馬河 渡健	林 聖子	上島 眞里	中本 尋之	
中野 良司	大野 健志	馬場 大輔	宇根 眞泰	長尾 理恵	
中村 慎太郎	大平 愛子	久浩 涼子	大田 泰徳	西坂 竜大	
中村 眞樹	岡庭 洋平	平山 傑			
長藤 義行	岡庭 牧子				
橋本 和也					

# 広島工業大学 建築・環境系教職員名簿

〔土木工学科 建築工学コース〕

氏 名	
佐藤立美	教授
高松隆夫	〃
宮崎祐助	〃
浅野照雄	〃
岩井哲	助教授
福田由美子	講師
大林真	技術職

〔環境学部 環境デザイン学科〕

田頭良子	教授
水田一征	〃
篠原道正	〃
森保洋之	〃
喜久川政吉	〃
神田隆至	〃
菅雄三	〃
菅原辰幸	〃
新田昌弘	〃
高本登	〃
村上徹	〃
横田壽	〃
竹内章司	〃
野添久視	〃
中山勝矢	〃
佐藤洋	助教授
西川加禰	〃
廣川協一	〃
清田誠良	〃
手越義昭	〃
黒岩俊介	〃
三村泰臣	〃
三好孝治	講師
平田圭子	〃

## 編集後記

会報誌発行にあたり御寄稿下さった方々、スポンサーの皆様に御礼申し上げます。  
また、いつも五三会会報誌発行にあたり御支援頂きましてありがとうございます。  
私自身が会報誌編集委員に携わって4回目となりますが、大変な編集作業を乗り越えていけたのは、編集委員の協力のおかげだと思っています。ここに改めて感謝致します。

会報誌は、会員の皆様との交流を厚く出来るようなものを作っていきたいと思っていますので、御協力の程宜しく御願ひ致します。

### 「五三会」第28号編集委員

寺尾 慈子 (H4) 原尻 忠始 (H4)  
高野 栄一 (H4) 三好 征一 (H9)

### (連絡先)

五三会事務局  
広島市佐伯区三宅二丁目1番1号  
広島工業大学環境学部環境デザイン学科  
菅原研究室内  
(〒731-5143) 082-921-3121 (代)

### 広島工業大学建築・環境系同窓会誌

### 「五三会」第28号

編集責任者 三好 征一  
発行責任者 山野 正晴  
企画・製作 ハローデンイン  
発行 平成12年3月